

# 歴史の構想力

——Unthinking History——

野家 啓一（東北大学名誉教授）

*Imagination of History*

— *Unthinking history* —

Keiichi NOE

After the end of Hegelian philosophy of history as a Eurocentric grand story, the philosophy of history in the twentieth century experienced “the linguistic turn” twice. The first turn brought about the rise of analytic philosophy based on the modern logic developed by Frege, Russell and Wittgenstein in the first half of the 20<sup>th</sup> century. This movement is simply summarized as “the logic of history” and its point is expressed by Wittgenstein’s famous phrase “All philosophy is ‘critique of language.’” In the field of philosophy of history, C. G. Hempel tried to unify scientific explanation and historical one by the so-called “covering law model.” But this attempt was too radical to change the tradition of historiography. The second linguistic turn in history took place in the 1970’s under the influence of postmodern philosophy of language. The representative protagonist Hayden White characterized this current as “the poetics of history.” According to him, a historical work is none other than “a verbal structure in the form of a narrative prose discourse.” For such a reason, some kind of rhetorical elements inevitably intervene in historical description.

The first and the second linguistic turn were unfortunately discontinuous and there was an unavoidable discrepancy between them concerning the idea of history. It was Arthur Danto’s narratology of history to bridge these two linguistic turns and to combine the logic of history and the poetics of history. Danto’s key concepts are “narrative sentence” as well as “ideal chronicle,” which are closely related to each other. He draws surprising two conclusions from these concepts. One is that the past is constructed by our speech acts narrating past events. The other is that the meaning of the past event does not conclude, therefore it is a kind of “unfinished project.” On the basis of these reasons, Danto was bold to argue that “there is a sense in which we may speak of the past as changing” in relation to other events. This assertion sounds strange and may be suspected of relativism. Nevertheless, using a supereminent expression of Clifford Geertz, we can take the position of “anti anti-relativism” without committing to relativism. In classical logic, the law of double negation warrants the validity of the original statement. On the other hand, if we adopt the semantics of intuitionistic logic, double negation does not necessarily conclude the original statement. We can find the narrow path between obstinate realism and frank relativism. Such a position in the philosophy of history may be named as “modest or moderate anti-realism” concerning the reality of the past, because intuitionistic logic and anti-realism are not only compatible but also intimate in the world-view.

**Keywords:** linguistic turn, narratology, truth-value link, anti-realism, relativism

**キーワード：**言語論的転回、物語論、真理値連結、反実在論、相対主義

「歴史的なものは時間的なものである。・・・  
歴史は在るのではなく、成るのである。」三木清『歴史哲学』

## はじめに

いささか馴染みのない言葉をサブタイトルに掲げたが、“unthink”とは OED によれば “to remove from thought” すなわち「考え直す」あるいは「念頭から除く」ことを意味する英語である。この語が広く知られるようになったのは、アメリカの歴史社会学者イマニュエル・ウォーラースteinの著作 *Unthinking Social Science* 1991 のタイトルによるところが大きい。邦訳ではこの言葉に「脱思考する」の語が当てられている。通常なら 「社会科学の再考 Rethinking Social Science」とすべきところを「社会科学の脱思考 Unthinking Social Science」とした理由を、ウォーラースteinは次のように述べている。

「通常のこと」である再考することに加えて、われわれは 19 世紀社会科学を「脱思考する unthink」必要がある、とわたしは信じている。19 世紀社会科学の前提の多くが、わたしのみるところ、人をまどわせるものであり、窮屈なものであるのに、依然として、きわめて強力に我々の考え方をとらえているからである。これらの諸前提は、かつては精神を解放するものだと考えられていたが、今では、社会的世界を有効に分析するにあたっての、最大の知的障壁となっているからである。<sup>1</sup>

彼によれば、19 世紀の社会科学パラダイムの鍵を握ってきた中心的概念は「発展 development」にはかならない。その制約から自由になるために、ウォーラースteinが立ち戻ることを求めるのは、カール・マルクス（ただし政党マルクス主義とは無縁の）とフェルナン・プローデル（アナール派の歴史家で『地中海』の著者）という二人の思想家である。

それに倣うならば、19 世紀の歴史哲学を支配してきた中心概念は「発展」とともに「進歩 progress」ということになるであろう。そして、その知的障壁を「脱思考する」ためには、歴史哲学は 20 世紀に入って二度にわたる「言語論的転回（linguistic turn）」を経由する必要があったのである。

ところで、1993 年にウォーラースteinが来日し、京都精華大学で彼を囲むシンポジウムが開かれた折、メインの講演に先立って鶴見俊輔は「Unthink をめぐって 日米比較精神史」と題する序説的講演を行った。そこで鶴見は “unthink” を翻訳するに際して「考えほどく」という絶妙な日本語を選んでいる。その理由は以下のようなものである。

Unthink をどう訳すかというのはなかなか難しい問題なんですが、OED を引くと、ほとんど 400 年前の 1600 年の用例がある。“think and unthink again” というもので、チョーキルからとっています。「考えを戻す、またその考えを振りほどく」という反復行為を表しているんです。（略）単純に「捨てる」と

<sup>1</sup> イマニュエル・ウォーラースtein 『脱=社会科学——一九世紀パラダイムの限界』 本多健吉・高橋章監訳、藤原書店、1993 年、7 頁

いうことは、unthink じゃないんです。いったん忘れるが、忘れたものが内部の力、想像力のもとになって働く、これが unthink なんですね。（略）つまり、考えを捨てるのではなくて、考えをほどくということ。考えを意識的、無意識的に影響を受けながら編み続けるということ。これは think and unthink なんですね。<sup>2</sup>

見事な語釈と言うべきだが、ここで鶴見が think と unthink のあいだに「想像力（構想力）」を介在させていることに注目すべきであろう。「念頭から取り除く」という意味が unthink にあることはもちろんだが、それは「忘れる」や「捨てる」こととはまったく異なる。あえて言えば、それは現象学の方法としての「エポケー（判断停止）」に近い概念操作と言うべきだろう。すなわち、思考を保持したまま「括弧に入れる」という手続きである。括弧に入っているあいだ、思考は想像力（構想力）の働きを借りて無意識裡に熟成を続ける。ここでドイツ語に「追熟（Nachreife）」という語があることを思い出してもよい。この言葉は、収穫された果物などが貯蔵中に熟成することを意味する。それを借用すれば、“unthink” という手続きは想像力を媒介にして思考の「追熟」を促すのである。

## 1. 二つの「言語論的転回」

ウォーラースteinが「19世紀社会科学」のパラダイムを克服の対象として名指ししたとき、おそらく彼の念頭にあったのはマルクス（旧来の）とウェーバーの社会科学であったに違いない。そのことは19世紀社会科学の基盤に新カント学派に由来する「法則定立的一個性記述的二律背反 nomothetic-ideographic antinomy」<sup>3</sup>に基づいた認識論を挙げていることからも明らかであろう。それに対して、ウォーラースteinは「発展」に代えて「時空 TimeSpace」概念を対置することにより、社会科学の役割を「近代世界システムの歴史的展開」<sup>4</sup>の再構成と記述に見定めようとしたのである。

歴史哲学の領域でその類比物を求めるすれば、19世紀歴史哲学のパラダイムとしてヘーゲルの『歴史哲学講義』（1840）を挙げることに異論はないであろう。すなわち、世界史の流れを俯瞰して歴史総体の意義と目的（例えば「自由の自己実現」）を明らかにする、ヨーロッパ中心主義の衣をまとった「大きな物語」の構築である。しかしながら、大きな物語としての歴史哲学は20世紀をまたぎ越すことはできなかった。ヤスバースの『歴史の起源と目標』（1949）は、タイトルからしてその掉尾を飾る作品であり、「枢軸の時代」としてインドや中国（シナ）をも世界史の流れの中に位置づけたことも含めて、「大きな物語」が放った最後の光芒ともいるべき著作であった。<sup>5</sup>

<sup>2</sup> 鶴見俊輔「Unthink をめぐって——日米比較精神史」、京都精華大学出版会編『リベラリズムの苦悶』阿吽社、1994年所収、2-3頁、18頁。

<sup>3</sup> I. ウォーラースtein、前掲書、8頁。

<sup>4</sup> 同前。

<sup>5</sup> この潮流のアンカーとしてフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』（1992）を挙げる人がいるかもしれないが、この著作はヘーゲル流の「大きな物語」のパロディーないしは徒花とでも言うべき作品である。

20世紀の歴史哲学を特徴づけるのは、歴史と言語の関わりについての自覺的反省である。「無文字社会（川田順造）」や「無字社会（宮本常一）」にも口頭伝承という形での歴史や歴史意識はありうるが、「言葉のない世界（田村隆一）」には歴史は存在し得ない。よく知られたハイデガーの「石くれば無世界的であり、動物は世界窮乏的であり、人間は世界形成的である」<sup>6</sup>という言葉を借りるならば、「石くれば無歴史的」であり「動物は歴史窮乏的」であるのに対し、ひとり言葉をもつ人間のみが「歴史形成的」なのである。あるいはそれを「人間は物語る動物である」と言い換えてもよい。みずからの体験を言葉で象ることによってそれを公共的経験に昇華し、象られた複数の出来事を時間軸に沿って筋立てる（ミメーシス）言語行為を「物語り行為（narrative act）」と呼ぶならば、それこそが「歴史形成的」営みにほかならないからである。

第一次の「言語論的転回」は、20世紀初頭にフレーゲとラッセルによって打ち建てられた現代論理学を基盤に、ヴィトゲンシュタインの「すべての哲学は『言語批判』である」<sup>7</sup>というテーゼをスローガンにして敢行され、論理実証主義ならびに分析哲学の勃興をもたらした。当初は自然科学の方法論の論理的分析が主たる対象であったが、その思想を引き継いだウィーン学団は「法則定立的一個性記述的二律背反」を前提とする認識論を否定し、自然科学と人文社会科学を単一の方法論（基本的には当時の最先端の科学であった物理学の方法論）によって統一することを試み、「統一科学運動」を展開した。要するに自然科学的説明も人文・社会科学的説明も、それが妥当な説明である限り、同じ説明方式に従わねばならないというわけである。歴史学についてそのことを明確に主張したのは、C. G. ヘンペルの論文「歴史における一般法則の機能」（1942）であった。論敵であったW. ドレイによって「被覆法則モデル（covering-law model）」と名づけられたこの型式は、説明項（explanans）と呼ばれる一般法則（L）と初期条件（C）を記述する一連の言明から当該の個別的情出来事（E）を指示する被説明項（explanandum）を論理的に演繹するという形をとる。一言でいえば「歴史の論理学」の探究である。

ヘンペルはドレイとの論争の過程で一般法則を確率・統計法則にまで拡張したが、たとえば「カエサルの暗殺」のみならず「1960年代最初の皆既日食」のような出来事もまた「無限に多くの物理的、化学的、生物学的、社会学的、さらには他の側面も提示しているので完全な記述、まして完全な説明を許すものではない」<sup>8</sup>と結論せざるをえなかつた。それゆえ「説明の被覆法則分析は普遍的決定論を前提もしなければ含意もしない」<sup>9</sup>のであり、ヘンペルはやむをえずそれを「説明スケッチ」と呼んだのである。

第一次の「言語論的転回」は論理分析や言語分析の方法を武器に主に哲学、とりわけ科学哲学の領域で展開され、ウィーン学団はそれを「統一科学運動」を通じて人文・社会科学の領域にまで拡張しようと試みたが、あまりに急進的に過ぎたその目標は中途で挫折せざるをえなかつた。それに対して1970年代から20世紀末にかけて勃興した第二次の「言語論的転回」は、歴史学プロパーを主戦場として提起された。その震源となったのは、ソシュール言語学の流れ

る。

<sup>6</sup> Martin Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik*, Vittorio Klostermann, 1983, S. 261f.

<sup>7</sup> L. ヴィトゲンシュタイン『論理哲学論考』4.0031、野矢茂樹訳、岩波文庫、2003年。

<sup>8</sup> C. G. Hempel "Reasons and Covering Laws in Historical Explanation" in Sidney Hook (ed.) *Philosophy and History*, New York University Press, 1963, p. 150-151.

<sup>9</sup> Ibid.

をくむJ. デリダ、M. フーコー、R. バルトらを代表とするポスト構造主義的言語論にはかならない。歴史哲学の分野でその動きを主導したヘイドン・ホワイトは主著『メタヒストリー』(1973)の巻頭に掲げた序論「歴史の詩学」のなかでその基本的視座を次のように掲げている。

わたしは、歴史学の作品をできるかぎり明晰な観点を据えて解明しようと思っている。つまり、歴史学の作品を《物語性を持った散文的言説》という形式をとる言語的構築物として把握するつもりである。一般には、この言語的構築物は歴史叙述として、つまり過去の構造や過程をモデル化したり写しとつたりしたものとして受け取られ、またそうした歴史研究という表現を通して「現実に存在していた実在」を説明しようとしている、と了解される。(傍点原文)<sup>10</sup>

ホワイトはこのように歴史を言語的構築物と見定めた上で、その目標を「19世紀ヨーロッパの歴史学的想像力 (historical imagination) が持つ深層構造に対する分析」<sup>11</sup>に見定めている。歴史が言葉によって構築される「物語性をもった散文的言説 (a narrative prose discourse)」であるとすれば、そこに修辞的要素が不可避的に介在するのは当然であろう。ヘロドトスが歴史叙述に中動態を用いて以来、優れた歴史家たちは修辞の技法と洗練に心を碎いてきたからである。ホワイトが歴史叙述の方法論を「歴史の詩学」と名づけているゆえんであろう。しかもそこには物語性を醸成する「歴史学的想像力」が働いていることを見逃すべきではない。物語を語るためにには感性だけでも悟性だけでも足りず、それらの「共通の根」である想像力 (構想力、facultas imaginandi) の働きを必要とするのである。

ただし、想像力 (構想力) の役割を強調して「物語り (narrative)」の概念に依拠することは、ただちに歴史的事実と虚構との境界を曖昧にする暴論として「歴史修正主義」や「相対主義」との短絡的な批判を誘発することであろう（実際、ホワイトもまた『アウシュヴィッツと表象の限界』をめぐる論争に巻き込まれた）。それゆえ第一次から第二次への言語論的転回の推移、すなわち「歴史の論理学」から「歴史の詩学」への転換には、二つの世界大戦をめぐる「戦争の記憶」をあいだに挟んで半世紀以上の時間を見る必要があったのである。その空白（ミッシング・リンク）を埋めたものこそ、逆説的ではあるが「物語論 (narratology)」の登場であった。

## 2. 物語論 (narratology) による架橋

第一次と第二次の言語論的転回を結びつけ、その移行をスムースならしめたのは「物語論」の力によるところが大きい。具体的にいえば、アーサー・ダントの『歴史の分析哲学』(1968、後に『物語りと知識』1985と増補の上改題、邦訳『物語としての歴史』) がそれである。彼の著作は、刊行年代からも内容的にも二つの言語論的転回を媒介し、架橋する場所に位置している。

<sup>10</sup> Hayden White, *Metahistory*, The Johns Hopkins University Press, 1973, p. 2. (岩崎稔監訳『メタヒストリー』作品社、2017年、50頁)

<sup>11</sup> *Ibid.* (邦訳、同前)

それはタイトルからして第一次言語論的転回の所産でありながら、「歴史の論理学」を批判的に乗り越えようすることによって、第二次言語論的転回を準備したのである。その意味で歴史哲学においてダントが果たした役割は、科学哲学においてトマス・クーンの『科学革命の構造』が果たしたそれと類比的ということができる。実際ダント自身、N. R. ハンソンの『科学的発見のパターン』(1958) とクーンの『科学革命の構造』(1962) によって引き起された科学哲学上の大転換に言及しながら次のように述べている。

私の本は、この哲学的転換のドラマの色に染め上げられている。本書が協調したり対立したりしている体系はヘンペルによって実践された科学哲学から引き継いでいるが、改革主義や革新の精神はハンソンやクーンのそれである。本書の枢要な章をなす「物語り文」はクーンの本が刊行されたと同じ年に発表された。(中略) 本書を貫いている私の概括的論点は、科学においては理論が観察に滲透しているというハンソンの見解とパラレルな仕方で、出来事に関するわれわれの意識には物語り構造が浸透しているというものである。<sup>12</sup>

ここでダントは言語論的転回における第一次から第二次への道を半歩踏み出している。そのことはヘンペルならびにハンソンとクーンへの言及によっても明らかである。一歩と言わず半歩と言ったのは、ヘンペルへの批判がいまだ中途半端な段階に留まっているからである。ヘンペルへの決定的批判は『歴史の分析哲学』の第10章で提起される。すなわち「ヘンペルは、彼の意味論的、構文論的規定については厳格であったが、方向を誤っていたのであり、説明行為の概念の中心たる語用論の次元を、まったく看過していた」<sup>13</sup> というのである。構文論 (syntax) では記号結合の「正／誤」が、意味論 (semantics) では言明の「真偽」が、そして語用論 (pragmatics) では言語行為の「成功／不成功」ないしは「適切／不適切」が評価の基準となる。それゆえ「物語り構造」が焦点化されるのは、もっぱら語用論の次元においてなのである。

それでは「物語り構造」とはいかなるものか。ダントは物語り行為の最小単位を「物語り文 (narrative sentence)」に見定める。その一般的な特徴は「時間的に離れた少なくとも二つの出来事を指示する」文というものである。もう少し詳しい説明をダント自身の筆で述べてもらおう。

私はここで、あらゆる種類の物語に現れ、ごく自然な日常の話し方のなかにさえ入り込んでいるが、歴史叙述において最も典型的に生じるように見える種類の文を、分離し分析してみようと思う。私はこれらを指して「物語文」と呼ぶことにする。これらの文の最も一般的な特徴は、それらが時間的に離れた少なくともふたつの出来事を指示するということである。このさい指示された出来事のうちで、より初期のものだけを(そしてそれについてのみ)記述するのである。通常それらは、過去時制をとる。

14

たとえば「30年戦争は1618年に始まった」という例文がそれに当たる。これは单文ではある

<sup>12</sup> Arthur C. Danto, “Introduction to the Morningside edition” in *Narration and Knowledge*, Columbia University Press, 1885, p. xii.

<sup>13</sup> Arthur C. Danto, *Narration and Knowledge*, Columbia University Press, 1985, p. 211. (河本英夫訳『物語としての歴史』ちくま学芸文庫、2024年、382頁)

<sup>14</sup> Ibid., p. 143. (邦訳、258頁)

が、「30年戦争」という固有名を含むことによって、30年戦争の開始と終結という二つの出来事に言及しており、より初期の開始という出来事を過去時制で記述していることがわかる。もう一つダントは「アリストタルコスは紀元前270年に、コペルニクスが1543年に発表した理論を先取りしていた」<sup>15</sup>という例文を挙げている。これもまたアリストタルコスの先駆的業績とコペルニクスの地動説理論という二つの出来事を指示し、時間的に先立つアリストタルコスの業績を記述しているのである。

こうした物語文の概念とともに、ダントの議論を支えているのは「理想的編年史」と名づけられた一種の思考実験である。この編年史の作者は、いわば神の視点から世界中の出来事を俯瞰する理想的な歴史家と考えてよい。ダントは彼の超人的能力を以下のように設定する。

彼はたとえ他人の心のなかであれ、起こったことすべてを、起こった瞬間に察知する。彼はまた瞬間的な筆写の能力も備えている。「過去」の最前線で起こることすべてが、それが起こったときに、起こったように、彼によって書き留められるのである。その結果生ずる生起しつつある叙述を、私は「理想的編年史」(Ideal Chronicle) と名付けることにしよう。<sup>16</sup>

だが、この理想的な歴史家は、歴史叙述に不可欠の「物語文」を語ることができない。彼は現在の出来事である30年戦争の開始は目撃できても、未来の出来事である30年後の戦争終結を現時点で目撃することはできないからである。言い換えれば、1618年の時点で「30年戦争」という名辞を使える歴史家は存在しない。それを使えるのは1648年以後を生きる歴史家だけだからである。それゆえダントは「ひとつの出来事についての真実全体は、あとになってから、時にはその出来事が起こってからずっとあとにしかわからないし、物語のなかのこの部分は、歴史のみが語りうるのである」(傍点原文)<sup>17</sup>と述べている。要するに、歴史は常に「回顧的」視点から語られるということである。

この「物語文」と「理想的編年史」というダントの理論装置から得られる歴史哲学的教訓はいかなるものであろうか。ダントの議論をわが国で初めて子細に検討した黒田亘は、それを二つの点に纏めている。一つは「過去とは過去を語るわれわれの言語的行為によって構成されるものである」ということ、そして第二は「いったん起こった出来事の意義は決して完結することはない」ということである<sup>18</sup>。前者はわれわれの言語のもつ創造的・構成的働きのことであり、言葉によって過去世界を象る力あるいは物語り機能と言い換えてもよい。だが、後者は少々説明を要する。黒田が言うように「われわれは確かに過去を変えることはできない。これは明らかに言語がわれわれに課した根本的な制約の一つ」<sup>19</sup>だからである。

もちろんその通りだが、過去の出来事の意義は変化することがありうる。先のアリストタルコスとコペルニクスの関係がその一例である。両者のあいだは古代と近世と時代的にも隔たっているし、因果関係も相互作用ももちろんない。にもかかわらず、コペルニクスの出現によって

<sup>15</sup> Ibid., p. 156. (邦訳、283頁)

<sup>16</sup> Ibid., p. 149. (邦訳、269頁)

<sup>17</sup> Ibid., p. 151. (邦訳、274頁)

<sup>18</sup> 黒田亘『知識と行為』東京大学出版会、1983年、154-155頁。

<sup>19</sup> 同前、156頁。

アリストタルコスは本人の知らないところで「地動説の先駆者」という新たな性質を獲得したのである。少々込み入っているので、この間の事情については、ダント自身の説明を借りて補足しておこう。

「過去」の出来事の記述が誤っている場合、それらを真に変える唯一の方法は、「名辞の修正」である。だが一方「過去」が変化していると言いうるような、ある意味のとり方がある。つまり私たち（あるいはなにか）がその出来事に因果的に作用するとか、 $t_1$ 時が過ぎたあとにある事柄が $t_1$ 時に対して生じ続いているからというのではなくて、 $t_1$ 時の出来事がその後の出来事に対して異なった関係に立つようになるがゆえに、 $t_1$ 時の出来事が新たな特性を獲得するという意味において、過去が変化するのである。

20

「過去が変化する」とは、いささか穏やかでない物言いだが、ダントの目論見は過去も未来と同様に未完結であることを示すことにある。つまり、われわれが歴史内存在、すなわち時間とともに変化する存在である限り、過去もまた「未完のプロジェクト」であるほかはないのである。逆に言えば、現在の出来事の意義を完結したものとして語る言葉を持っていないがゆえに、われわれは「未来への構想力」によってその空白を埋めることができるのである。この点については次節でマイケル・ダメットの「真理値連結（リンク）」を金科玉条とする議論を検討することで、「過去の完結性」に対する「過去の未完結性（オープン・エンド）」を提起するダントの見解を擁護することを試みたい。

### 3. 過去をめぐる実在論と反実在論

マイケル・ダメットは、古典二値論理における排中律の普遍的適用を保留する直観主義論理に基づいた反実在論を提唱した哲学者として知られている。議論を呼び起こした彼の論文「過去の実在」は、過去時制言明の解釈に関する実在論と反実在論の論争を扱ったものである。そこでダメットが対立の核心として取り上げるのが「真理値連結（the truth-value link）」という概念にほかならない。彼の問題提起によれば、「過去時制言明の反実在論的解釈は、相異なる時点で発話される相異なる時制をもつ言明には、その真理値の間に系統的な連結があると認めることと、両立不可能であるようにみえる」<sup>20</sup>というものである。それでは真理値連結（リンク）とはどのような事態を指すのか。ダメットの説明を聞いておこう。

もし私がいま「私はいま私の研究室にいる」と言うなら、私は、私の言葉どおり真なる現在時制の言明を立言している。この言明を A と呼ぶことにしよう。ところで、ちょうど一年後ある人が「一年前ダメットは彼の研究室にいた」という言明（これを B と呼ぶ）をなす、と仮定せよ。すると言明 A はい

<sup>20</sup> Arthur C. Danto, *Narration and Knowledge*, op. cit. p.155. (邦訳、280-281頁)

<sup>21</sup> Michael Dummett, “The Reality of the Past” in *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press, 1978, p. 363. (藤田晋吾訳『真理という謎』勁草書房、1986年、389-390頁)

ま真なのだから、一年経ってなされた言明 B も同様に真であることは、真理値連結の帰結である。<sup>22</sup>

それゆえ「過去自体」の存在を認める実在論者は、過去時制言明の意味を理解することは、真理値連結（リンク）を理解することだと主張する。それに対して反実在論者は、過去時制言明の意味を理解することは、その言明の主張可能性ないしは正当化可能性を明示することにほかならない、と反論する。両者の違いをダメットの表現を借りて対比すれば、「反実在論にとっては、過去はそれが現在に残している痕跡の中に存在するだけであるが、実在論者にとっては、過去はそれが現在であったときそのまま、過去として、存在する」<sup>23</sup>となるだろう。その上で彼は論文「過去の実在」の末尾を、自分は「過去に関する言明についての反実在論者の見解が、少なくとも即座に棄却されるべきではないこと、を示した。それを示すことが本稿の主たる目的であった」<sup>24</sup>と締め括っている。つまり、真理値連結（リンク）の存在が反実在論者の言い分に甚だしく矛盾するものではないことを彼はそれなりに認めていたのである。

ところが、この論文から 35 年後に刊行された小著『真理と過去』（2004）においては、ダメットはその考えを大幅に変更し、真理値連結（リンク）の正しさを承認すると同時に、それを「形而上学的原理」とさえ呼んでいるのである。反実在論者ダメットの「実在論への転向」と言わざるをえない。

われわれは、起こったことの現在の痕跡に対して、過去についての言明を真ないし偽ならしめるものとしての「過去に起こったこと」を対置したいと思います。それこそが、われわれの信ずるところ、真理値リンクによって顕揚される形而上学的原理だからです。今起こっていることは、一年前に起こったことについて一年経って為される言明を真ならしめます。<sup>25</sup>

この「過去は変化しない」という結論にいたるダメットの論証は周到なものだが、先に検討したダントの「過去が変化する」という見解とは当然ながら対立する。私自身としては、ダメットの議論を批判的に検討することを通じて、ダントの主張に与したいと考えている。真理値連結（リンク）の原理に依拠してダメットは「過去についての言明は、その言明が指していた時点で起こったことと、その言明がその時点で持つに至った真理値に即して、今なお（still）真か偽かでなければならない」<sup>26</sup>（傍点原文）と述べている。問題はこの「今なお」という副詞である。

先にダメット自身が挙げた事例に立ち戻って考えてみよう。「私はいま私の研究室にいる」（A）と「一年前ダメットは彼の研究室にいた」（B）という言明の対比である。（A）はもちろん現在時制言明であり、その正当化条件（真理条件）は知覚ないしは目撃証言であろう。それに対して（B）は過去時制言明であり、その正当化条件（真理条件）は想起ないしは記録（文字、

<sup>22</sup> Ibid. (邦訳、390 頁)

<sup>23</sup> Ibid. p. 370. (邦訳、402 頁)

<sup>24</sup> Ibid., p. 374. (邦訳、410 頁)

<sup>25</sup> Michael Dummett, *Truth and the Past*, Columbia University Press, 2004, p. 77. (藤田晋吾・中村正利訳『真理と過去』勁草書房、2004 年、118 頁)

<sup>26</sup> Ibid., p. 80. (邦訳、123 頁)

映像など）であろう。要するに、(A) から (B) への時間的推移は、言明の時制転換をもたらすのであり、ひいては正当化条件（真理条件）をも大きく変化させることになる。したがって、(A) と (B) の真理値連結（リンク）は自明の理でもなければ形而上学的原理でもなく、それ自体の正当化を必要とするのである。

たとえば一年前の同日同時刻に隣りの研究室で X 教授が殺害されたとしよう。その場合、ダメット教授のアリバイは真理値連結（リンク）の原理によって自動的に保障されるわけではない。スコットランドヤードの捜査はそれほど甘くはないであろう。当然ながら、一年前のダメット教授のアリバイは、通常の捜査手続き（物的証拠、他人の証言など）によって改めて立証されねばならないのである。

かつてダメットは論文「過去の実在」のなかで「われわれが時間の中に存在するということは、世界が変化する、ということを意味する」<sup>27</sup>と述べていた。その通りである。そして世界が変化すれば、言明の時制も変化し、その正当化条件（真理条件）も変化せざるをえないのである。同時に彼は「反実在論者は、われわれが時間に浸されているという事実を、もっと真剣に受けとめる」<sup>28</sup>とも述べていた。それは、われわれは時間の流れの外側から世界を記述することはできないということにほかならず、われわれは時間に首まで浸かった「歴史内存在」であることの自覚にほかならないのである。

#### 4. 「反=反相対主義」の可能性

たしかに過去の存在を夢や幻と言い切れない以上、何らかの形で過去実在ないしは「過去自体」の存立を認めたくなるのは人間の根深い心的傾性と言うべきだろう。そして真理値連結（リンク）を承認しさえすれば、実在論すなわち過去自体の存在論と対応説的真理観を保持することができるるのである。それゆえ、ダメットほどの筋金入りの反実在論者が、その方向へ身を寄せたくなったとしても理解できないことはない。だが、そのような心的傾性は、われわれの抜きがたい「非の打ち所のない確固とした過去」を求める欲求に根差しているのではあるまいか。それに対して大森莊蔵は「未熟で貧相な過去」を対置して次のように述べている。

だがこの実生活で行われている過去はまことに貧弱な過去である。先に述べた現在への接続と他者の証言との一致、そして物的証拠という僅かに許された三種類の手続きだけを頼りにする未熟で貧相な過去が許されているだけである。非の打ち所のない確固とした過去などはありえない。<sup>29</sup>

ここで大森の言う「実生活で行われている過去」とは、ヘイドン・ホワイトがマイケル・オーケンショットを援用しつつ「実用的な過去」と呼ぶものにほかならない。すなわち「わたしたち全員が日常生活のなかで、もっているような過去についての観念」<sup>30</sup>のことである。そこから大

<sup>27</sup> Michael Dummett, *Truth and Other Enigmas*, op. cit. p. 373. (邦訳、408 頁)

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 369. (邦訳、401 頁)

<sup>29</sup> 大森莊蔵「色即是空の実在論」、『時間と存在』青土社、1994 年所収、201 頁。

<sup>30</sup> ヘイドン・ホワイト『実用的な過去』上村忠男監訳、岩波書店、2017 年、12 頁。

森はヒュームの「程々の（modest skepticism）懷疑」を先駆として、われわれが手にできるのは「程々の（modest, or, moderate）過去」でしかありえず、それに対応する「程々の（modest, moderate）実在論」に踏み留まるべきことを主張する。その境界を飛び越えて「頑迷な実在論」を確立しようとするところに数々の哲学的誤謬が生ずるというわけである。

だが、確固とした過去を求める頑迷な実在論への誘惑は、もう一つの誘因に由来している。それは相対主義への恐怖である。三木清は『歴史哲学』（1932）に先立って「社会経済大系」第19、20巻に発表した論稿「歴史哲学」（1928）のなかで、歴史主義と相対主義について次のように論じている。「けだし歴史主義の帰結として人々からあまねく非難されているところの相対主義は、歴史をもって單に成つてゐるものと解して同時にそれを成りつつ在るものとして把握しないのに由來する」<sup>31</sup>（傍点引用者）というのである。少々わかりにくいくらい表現なので、それに先立つ彼の概念規定を見ておくとしよう。

在る（Sein）ということが成つてゐる（Gewordensein）ということであるというのは、生の歴史的意識の、見逃すべからざる、しかし半分の真理である。（中略）生の歴史性の半面には他のこと、即ち在る（Sein）ということが成りつつ在る（Werden）ということであるという意味がある。在るもののが成つてゐるものであると同時に成りつつあるものであるというところに、存在の歴史性の全体の意味が横たわっている。<sup>32</sup>

そしてこの後半部分を三木は「生の歴史性」に対して「歴史の生命性」と呼び、そこには「過程的なるもの」すなわち「生成転化しつつあるもの」が表現されていると示唆するのである。この「過程」ないしは「生成転化」というあり方は、ダメットの言葉を借りれば世界とわれわれ自身が「時間に浸されているという事実」にほかならない。要するに、相対主義への恐怖は歴史を静止した不变不動の真理と捉えることに由来するのであり、それを時間とともに変化する力動的な真理と受け止めるならば、相対主義を恐れる必要はないということであろう。

「歴史の詩学」を唱道しつつ第二次「言語論的転回」を先導したヘイドン・ホワイトは、先の『実用的な過去』の「序言」において、「わたしは相対主義の立場（relativist position）をとっている。このことは十分に自覚している」<sup>33</sup>と居直りとも受け取れる宣言を表明している。ただし、実在論の軍門に下ることを潔しとしないが、かといって相対主義の旗を掲げるほどの度胸がない者（たとえば私）にとっては、どのような選択肢がありうるのだろうか。その場合には、文化人類学者のクリフォード・ギアツが唱道する「反=反相対主義」という立場はなかなか魅力的な提案に見える。それは「攻撃される側の見解を防衛しようと/orするのではなく、攻撃する側を攻撃しようとすることを示す」<sup>34</sup>方策にほかならない。つまり、相対主義を積極的に擁護するのではなく、相対主義の批判者の出鼻をくじこうとする戦略である。ポイントは二重否定の直観主義的用法にある。ギアツによれば「この二重否定は、拒まれている対象を受け入れること

<sup>31</sup> 三木清「歴史哲学」、『三木清全集』第20巻、岩波書店、1986年所収、63頁。ただし、表記を現代仮名遣いに改めた。

<sup>32</sup> 同前、45頁。（ただし表記を現代仮名遣いに改めた）

<sup>33</sup> ヘイドン・ホワイト『実用的な過去』前掲書、x頁。

<sup>34</sup> クリフォード・ギアツ『解釈人類学と反=反相対主義』小泉潤二編訳、みすず書房、2002年、60頁。

となく、拒んでいるものを拒むことを可能にします。これが反相対主義について私が試みたいことです」<sup>35</sup>というわけである。

周知のように、古典論理では二重否定が元の命題を帰結することは妥当な推論（恒真式）であるが、論理演算子の直観主義的解釈をとれば、排中律が成立しないのであるから、二重否定から元の命題は帰結しない<sup>36</sup>。ダメットを引き合いに出すまでもなく、直観主義論理と反实在論は親和性が高いのであるから、反=反相対主義の立場は、大森莊藏の「程々の実在論」に倣うならば「程々の（modest, moderate）反实在論」と名づけることができる。だとすれば歴史理解にとって必要なのは、頑迷な実在論でも相対主義的反实在論でもなく、「程々の反实在論」なのである。

---

<sup>35</sup> 同前、61 頁。

<sup>36</sup> 小野寛晰『情報科学における論理』日本評論社、1994 年、202 頁などを参照。